

B.参加者感想

●喜多洋子 (NPO 法人子育て支援ワーカーズ プチトマト代表 <http://petittomato.i-cis.com/>)

特に印象に残ったのは、分科会 A-③「家族を『動かす』例外と偽解決、ふたつの方法を中心に」の東北大学大学院教育学研究科教授、長谷川啓三先生の講義でした。例外が少しでもないかという問いかけをすることで、その人が持っている心の底にあるものを引き出し、その状況に自から気づかせる方法は、まさに、目からウロコでした。そして、立命館大学の山本耕平先生の講義も、ニートやひこもりの若者の立場に寄り添ったとても暖かい心を感じることができました。今回はじめて？という、NPO の組織運営に関する講義とワークショップがあったことも NPO の団体の出席者にとっては、有意義だったし、私たちサポネットの相談業務にも活かせるものだったと思います。最終日の早稲田大学教育学部教授、本田恵子先生の「キレやすい子の理解と対応」は、ニートやひきこもりの中に多いと思われる、障がいをもつお子さんの心の状況の理解を広げられ、具体的な対応が学べたのは、とても良かったです。また、全国の相談業務にかかわる仲間と出会って、語り合えたのも収穫の一つでした。体調不良のまま、4泊5日という長いようで、短かった研修を乗り切れたのは、サポネットの他の皆さんがいたからです。本当にありがとうございました。

●吉田三千代 (ネイバーズ代表 <http://asianneighbors.wordpress.com/>)

内容の濃い研修だった。ワークショップ形式のものや実際にロールプレイをするものなどは、特に印象に残る。講義も充実していたと思う。北海道からも 10 名ほどの方が参加しており、ニートやひきこもりの人数は多いと思うが、センター登録を調べると、あまり多くはない。まだこれからの分野なのか、障がいなどと一緒にくくられているのかわからない。

親の会が多いのも特徴のようだが、わりと一般的に言えることは親が入ると問題がややこしくなったり、長期化することだろうと思う。本人が納得して外に出たり、仕事をする意欲を持つには子離れ、親離れが必要なのだろう。しかし、本当に苦勞されているケースもあり、自分たちがいなくなったときのことまで考えている親の話も聴くと、制度化も必要なのかなと思う。

最近、大学生でさえ、ニート？と思われる学生もいるので、問題はもっと深い根っこがあるだろうと感じている。対処療法より予防ができるのが良いので、勉強する機会をもっと身近でもふやしていけたらと思う。最後に、このような研修の機会があれば、ぜひ相談員は積極的に参加したらよいと思う。

●三浦博志 (ヒマラヤ圏サパナ代表 <http://www.sapana.de/>)

今回の研修会内容は、「組織作りの手法 (No.1、No.4)」と「困難を有する子ども・若者の分野 (No.2、No.3、No.5、No.6)」に大別される。

「組織作りの手法」は、各界の団体に共通する視点で語られ、自分の現場を、離れた視点で振り返る機会となった。ただ、研修会 No.1 では、ワークショップのテクニックだけが上滑りした感があった。研修会 No.4 の、「評価を定量化する」手法は、この分野の現場担当者とは相容れない面も持つ考え方だったが、部外者だからこそ指摘できる新しい試みと思えた。あいまいな評価に慣れきっている NPO 全般に、刺激になる提案ではないかと感じた。

「困難を有する子ども・若者の分野」の分科会において、No.2、No.6 では“家族のシステム”、No.3 では“社会の高度成長”に焦点をあて問題の原因を探った。これら各分科会に共通していた、“これらの問題を個人の問題とは捉えない”、という視点は印象的だった。No.5 では、“キレル”という子どもの精神状態が説明され、それらを把握しておくことで、問題行動への対応に役立つ可能性を感じた。分科会を通して特に、No.3 で話された“若者たちの発達を歪めてきた社会構造を、若者らと共に学びあい、社会と向き合うべきだ。”という言葉に、今後の社会、人々の方向性が示されていると感じられた。多額の予算をかけたこのような全国規模の研修会を、より成果あるものにするためには、参加者間の全国ネットワークを作ることも、考えていく必要がある。

【内閣府】

「困難を有する子ども・若者の相談業務 に携わる民間団体職員研修」報告書

期間：2012年1月30日～2月3日

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター

対象者：表題該当者を対象とする施設の相談員。実参加数 98 名

さぼネット参加者



吉田三千代、三浦博志、喜多洋子

報告書作成

2012年3月27日

さっぽろパブリックサポートネットワーク (さぼネット)

さぼネットは、全分野の NPO を対象に、設立や運営などの相談、情報提供を行っている任意団体です。市民活動相談窓口は札幌市市民活動サポートセンターにあり、2006 年より運営しています。さぼネット 6 人のメンバーは各々、自らの団体を運営しており、その経験を生かし相談業務に当たっています。

近年、本研修会の対象とされているような青年、壮年達が施設や相談窓口を利用される事が増え、中にはトラブルを起こすような場面もあります。そのような状況から、この問題をある程度掘り下げて学ぶ必要性を感じ、今回の研修会へ参加しました。

●市民活動相談窓口

日時：面談相談 火～金曜 15:00～18:30 電話相談：011-728-5888

場所：札幌市市民活動サポートセンター (札幌市北区北 8 西 3 札幌エルプラザ 2F)

【内閣府】「困難を有する子ども・若者の相談業務に携わる民間団体職員研修」

A.研修概要

日にち 時間	テーマ、講師、内容						
1月30日 3時間	<p>No.1. 「チームビルディングの必要性」 森ビル（株）タウンマネジメント事業室サービス企画トレーナー今井卓 六本木ヒルズを管理し、住民、企業など当地に関わる人々のまちづくりをマネジメントするセクション担当者。チームを組織し運営する技法をワークで学ぶ。 全体受講 98名 7名×14グループに分かれて、ワークをメインに行った。</p> <p>主な内容</p> <table border="1"> <tr> <td>1. 工作ワーク</td> <td>短時間で、グループ毎にできるだけ高いタワーを作るワークを行った。→発想のまとめ方、役割分担の要領を学んだ。</td> </tr> <tr> <td>2. ワールドカフェ</td> <td>嬉しいこと、相手に望むことなどのキーワードで自由討論し、メンバー間の意思疎通の方法を考えた。</td> </tr> </table>	1. 工作ワーク	短時間で、グループ毎にできるだけ高いタワーを作るワークを行った。→発想のまとめ方、役割分担の要領を学んだ。	2. ワールドカフェ	嬉しいこと、相手に望むことなどのキーワードで自由討論し、メンバー間の意思疎通の方法を考えた。		
1. 工作ワーク	短時間で、グループ毎にできるだけ高いタワーを作るワークを行った。→発想のまとめ方、役割分担の要領を学んだ。						
2. ワールドカフェ	嬉しいこと、相手に望むことなどのキーワードで自由討論し、メンバー間の意思疎通の方法を考えた。						
1月31日 全日	<p>No.2. 分科会 A-③ 「家族を『動かす』：例外と偽解決、ふたつの方法を中心に」 東北大学大学院教育学研究科教授 長谷川啓三 家族心理学、家族療法の手法の基礎を学び、家族問題を考える。 受講約 30名 6名×5グループに分かれて、講義+ワークを行った</p> <p>主な内容</p> <table border="1"> <tr> <td>1. 家族療法とは</td> <td>不登校、暴力などの原因は個人ではなく、家族関係（システム）にあると考える。その関係の悪循環と良循環を見つけ、良循環を拡大する働きかけをすることで治療する。また、「犯人を捜さない」こともキーワード。誰も悪くない、システムに問題がある、とする考え方を学んだ。</td> </tr> <tr> <td>2. ロールプレイ</td> <td>両親と子どもの買い物でよく起きるトラブルを台本として、各グループで演じた。それによって、悪循環を理解し、システムの問題を解決する良循環のを見つけ方を学んだ。このトラブルの事例では「両親連合（子どもに対し父母の姿勢を一致させること）」が解決のキーポイントになる可能性を学んだ。</td> </tr> <tr> <td>3. 事例</td> <td>不登校、暴力の男子中学生の事例から、悪循環の関係の中から「例外」を発見して、良循環を生み出した事例を聞いた。この事例でも「両親連合」による良循環への展開が見られた。</td> </tr> </table>	1. 家族療法とは	不登校、暴力などの原因は個人ではなく、家族関係（システム）にあると考える。その関係の悪循環と良循環を見つけ、良循環を拡大する働きかけをすることで治療する。また、「犯人を捜さない」こともキーワード。誰も悪くない、システムに問題がある、とする考え方を学んだ。	2. ロールプレイ	両親と子どもの買い物でよく起きるトラブルを台本として、各グループで演じた。それによって、悪循環を理解し、システムの問題を解決する良循環のを見つけ方を学んだ。このトラブルの事例では「両親連合（子どもに対し父母の姿勢を一致させること）」が解決のキーポイントになる可能性を学んだ。	3. 事例	不登校、暴力の男子中学生の事例から、悪循環の関係の中から「例外」を発見して、良循環を生み出した事例を聞いた。この事例でも「両親連合」による良循環への展開が見られた。
1. 家族療法とは	不登校、暴力などの原因は個人ではなく、家族関係（システム）にあると考える。その関係の悪循環と良循環を見つけ、良循環を拡大する働きかけをすることで治療する。また、「犯人を捜さない」こともキーワード。誰も悪くない、システムに問題がある、とする考え方を学んだ。						
2. ロールプレイ	両親と子どもの買い物でよく起きるトラブルを台本として、各グループで演じた。それによって、悪循環を理解し、システムの問題を解決する良循環のを見つけ方を学んだ。このトラブルの事例では「両親連合（子どもに対し父母の姿勢を一致させること）」が解決のキーポイントになる可能性を学んだ。						
3. 事例	不登校、暴力の男子中学生の事例から、悪循環の関係の中から「例外」を発見して、良循環を生み出した事例を聞いた。この事例でも「両親連合」による良循環への展開が見られた。						
2月1日 全日	<p>No.3. 分科会 B-④ 「若者がひきこもる意味と新たな学び方・働き方の保障」 立命館大学産業社会学部教授 山本耕平 若者たちの語りから、ひきこもる意味を考える。 受講約 30名 6名×5グループに分かれて、講義+ワークを行った。</p> <p>主な内容</p> <table border="1"> <tr> <td>1. 若者達がどう阻害されてきたのか</td> <td>1960代以降の経済成長と社会事象を振り返り、競争主義が引きこもりの要因の一つでもあることを学んだ。 38歳ひきこもり男性の事例から、彼の孤立感と70年代の地域・社会状況の関係を探った。</td> </tr> <tr> <td>2. 韓国 HAJA</td> <td>引きこもり、不登校が急増している韓国の事例。学校が合わない10代達のための、自主的な協力学習の場の取り組みを学んだ。</td> </tr> </table>	1. 若者達がどう阻害されてきたのか	1960代以降の経済成長と社会事象を振り返り、競争主義が引きこもりの要因の一つでもあることを学んだ。 38歳ひきこもり男性の事例から、彼の孤立感と70年代の地域・社会状況の関係を探った。	2. 韓国 HAJA	引きこもり、不登校が急増している韓国の事例。学校が合わない10代達のための、自主的な協力学習の場の取り組みを学んだ。		
1. 若者達がどう阻害されてきたのか	1960代以降の経済成長と社会事象を振り返り、競争主義が引きこもりの要因の一つでもあることを学んだ。 38歳ひきこもり男性の事例から、彼の孤立感と70年代の地域・社会状況の関係を探った。						
2. 韓国 HAJA	引きこもり、不登校が急増している韓国の事例。学校が合わない10代達のための、自主的な協力学習の場の取り組みを学んだ。						

	<table border="1"> <tr> <td>3. グループ議論 1</td> <td>各自の体験談から、ひきこもりの社会的要因と思われるものを発言しあった。要因として挙げられたものは、転校、片親環境、発達障害、核家族化、企業の体力不足など。</td> </tr> <tr> <td>4. グループ議論 2</td> <td>彼らのための新たな働き方について意見を出し合った。就労を押し付けられない、選択肢を多く用意する、「結い」の現代版を、農業体験、ネットビジネス、ボランティア以上アルバイト未満の働き方を用意してあげる、ルールを敷かない、などが挙げられた。</td> </tr> </table>	3. グループ議論 1	各自の体験談から、ひきこもりの社会的要因と思われるものを発言しあった。要因として挙げられたものは、転校、片親環境、発達障害、核家族化、企業の体力不足など。	4. グループ議論 2	彼らのための新たな働き方について意見を出し合った。就労を押し付けられない、選択肢を多く用意する、「結い」の現代版を、農業体験、ネットビジネス、ボランティア以上アルバイト未満の働き方を用意してあげる、ルールを敷かない、などが挙げられた。				
3. グループ議論 1	各自の体験談から、ひきこもりの社会的要因と思われるものを発言しあった。要因として挙げられたものは、転校、片親環境、発達障害、核家族化、企業の体力不足など。								
4. グループ議論 2	彼らのための新たな働き方について意見を出し合った。就労を押し付けられない、選択肢を多く用意する、「結い」の現代版を、農業体験、ネットビジネス、ボランティア以上アルバイト未満の働き方を用意してあげる、ルールを敷かない、などが挙げられた。								
2月2日 全日	<p>No.4. 「相談業務を続けるための組織作り」 立教大学 21世紀社会デザイン研究科准教授 坂本文武 NPO業界の実態、広報のあり方を学び、仮想NPOの予算書ワークを行う。 全体受講 98名 7名×14グループに分かれて、講義+ワークを行った。</p> <p>主な内容</p> <table border="1"> <tr> <td>1. 組織拡大のための資金調達</td> <td>困難を有する若者たちは年々増加しているため、組織を拡大していく必要がある。そのための事業設計には、未来を見据えた「物語（感性）」と客観的な「事実（理性）」が必要。その上で、寄付、助成、ファンドレイジングに取り組む。 ■ワーク：寄付者を想定し、寄付を要請するワークを行い、「物語」「事実」の組み立て方を学んだ。</td> </tr> <tr> <td>2. 実績評価</td> <td>NPOの自己満足を脱するために、定量的な目標を作る。それによって事業の評価が可能になる。 ■ワーク：一見、定量化できないと思える仕事内容を定量化してみるワークを行った。例えば、利用者の「ありがとう」という言葉の回数で満足度を測るなど。</td> </tr> <tr> <td>3. 広報</td> <td>NPOは少数派なので、相手の立場に立った伝達を心がけなければ伝わらない。また関心を持っている人々も少数であるから、ターゲット、ニーズを絞り込まなければ無駄が大きくなる。</td> </tr> <tr> <td>4. ワーク</td> <td>仮想NPOの赤字予算書を例題に、赤字額を解消する方法を考えるワークを行った。新たな投資を避ける案、遊休資産の活用案などがポイントになった。</td> </tr> </table>	1. 組織拡大のための資金調達	困難を有する若者たちは年々増加しているため、組織を拡大していく必要がある。そのための事業設計には、未来を見据えた「物語（感性）」と客観的な「事実（理性）」が必要。その上で、寄付、助成、ファンドレイジングに取り組む。 ■ワーク：寄付者を想定し、寄付を要請するワークを行い、「物語」「事実」の組み立て方を学んだ。	2. 実績評価	NPOの自己満足を脱するために、定量的な目標を作る。それによって事業の評価が可能になる。 ■ワーク：一見、定量化できないと思える仕事内容を定量化してみるワークを行った。例えば、利用者の「ありがとう」という言葉の回数で満足度を測るなど。	3. 広報	NPOは少数派なので、相手の立場に立った伝達を心がけなければ伝わらない。また関心を持っている人々も少数であるから、ターゲット、ニーズを絞り込まなければ無駄が大きくなる。	4. ワーク	仮想NPOの赤字予算書を例題に、赤字額を解消する方法を考えるワークを行った。新たな投資を避ける案、遊休資産の活用案などがポイントになった。
1. 組織拡大のための資金調達	困難を有する若者たちは年々増加しているため、組織を拡大していく必要がある。そのための事業設計には、未来を見据えた「物語（感性）」と客観的な「事実（理性）」が必要。その上で、寄付、助成、ファンドレイジングに取り組む。 ■ワーク：寄付者を想定し、寄付を要請するワークを行い、「物語」「事実」の組み立て方を学んだ。								
2. 実績評価	NPOの自己満足を脱するために、定量的な目標を作る。それによって事業の評価が可能になる。 ■ワーク：一見、定量化できないと思える仕事内容を定量化してみるワークを行った。例えば、利用者の「ありがとう」という言葉の回数で満足度を測るなど。								
3. 広報	NPOは少数派なので、相手の立場に立った伝達を心がけなければ伝わらない。また関心を持っている人々も少数であるから、ターゲット、ニーズを絞り込まなければ無駄が大きくなる。								
4. ワーク	仮想NPOの赤字予算書を例題に、赤字額を解消する方法を考えるワークを行った。新たな投資を避ける案、遊休資産の活用案などがポイントになった。								
2月3日 1.5時間	<p>No.5. 「キレやすい子の理解と対応」 早稲田大学教育学部教授 本田恵子 「キレル」状態の心理学的理解と保護施設の実映像を見て、対応を学ぶ。 全体受講 98名 「キレル」という行為はアンガー（単なる怒りではなく、諸々の感情が混沌とした状態）の状態である。そのメカニズムを理解し、それに対応するスキルを学んだ。</p>								
2月3日 1.5時間	<p>No.6. 「家族交流会の運営」 福岡県立大学大学院看護学研究科講師 四戸智昭 家族交流会の手法による、家族問題の解決事例を学ぶ。 全体受講 98名 講師は、嗜癖行動学（ギャンブル、アルコール依存など）の視点から、不登校、引きこもりを研究している。その視点からは、不登校、引きこもりの問題を「そのような子どもを持つ親の病」として考える。その原因として、家庭内の「暗黙のルール」「親と子の共依存」があることを学んだ。「親の病」に気づく手段として講師が進めている、親たちのグループミーティングの効果、そのメカニズムなどを学んだ。</p>								